



文明開化の明治の初めには、珍談、奇談がごろごろしていた。が、なかには国際美談も生まれて、美しいヒューマニズムの花も咲かせたのだった。

明治七年夏、フランスからチャリネ曲馬団が来日、新潟で興行した。開港間もないこの町でも、異国の曲馬団は大評判、連日の大入りが続けた。ところが、この曲馬団につき添って来たイタリア人のコック、ピエトロ・ミリオレが、あるとき大けがをし、それが治らないうちに、曲馬団は日程のつごうで彼を置き去りにしたままつぎの興行地へと引き揚げた。

異境に一人捨てられたピエトロは、目の前が真っ暗になるほど心細かったが、捨てる神あれば拾う神あり、曲馬団が新潟興行中に臨時に雇い入れていた権助、おすいの親娘が、この不運な青年を自宅に引き取って看護することになった。そして、けがの手当ては長崎で医学を修めて来た地元の医者竹山屯が引き受けてくれることになった。

この美談は、やがて新潟地方一帯に知れわたり、ピエトロ青年のけがが治ったとき、時の県令(知事)楠本正隆は、大金二百円を差し出し、ピエトロ青年に思い切つて新潟の地で自立するよう勧めたのである。

そこで、先の竹山医師の栄養学的見地からのアドバイスもあって、当時、文明開化のシンボルだった牛鍋屋の開業となるのだが、この牛鍋屋は、もちろん北陸地方での第一号。珍しさとハイカラムードが受けて大繁盛だった。紅毛碧眼こうもうへきがんのピエトロ青年は、そのうち、客から「ミオラ(ミリオレのなまったもの)」と呼ばれるようになり、イタリア人特有の明るさもよみがえって、店内はそこが日本であることを忘れさせるほどの異国情緒にあふれかえった。

そんなピエトロに、けがの看病中から思いを寄せていたおすいも、やがてその思いが通じ、二人は夫婦になる。が、好事魔多しというように、明治十三年に大火に遭い、二人は一夜にして丸裸になる。

ピエトロは、そのショックでイタリアに帰ると言い出したが、おすいをはじめ周囲が必死になって思いとどまらせ、こんどは本格的なレストラン「イタリア軒」のオープンにこぎつけたのだった。

しゃれた洋館スタイルのこの店は、当時の欧化主義の風潮の中で「新潟の鹿鳴館」と呼ばれて大繁盛した。が、三十年以上在日したあと、ピエトロはさすがに望郷の念やみがたく、とうとうひとり帰国したと伝えられる。

## 美談 新潟の鹿鳴館はイタリア軒